

組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成19年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称：「地域と伝統文化」教育プログラム

機 関 名：奈良教育大学

主たる研究科・専攻等：教育学研究科(修士課程)

取組代表者名：重松 敬一

キ ー ワ ー ド：地域、高度知識基盤社会、伝統文化、文化財、異文化理解

I. 研究科・専攻の概要・目的

奈良教育大学大学院教育学研究科は、「広く教育関係諸科学を研究し、教育実践に関する科学的研究を深めることによって、豊かな人間性と高度の専門的教養を備え、教育の理論と実践に関する優れた能力を有する教員及び教育者を養成する」(学則第 20 条)ことを目的としている。教育学研究科には、修士課程として学校教育専攻(学生定員:10名)と教科教育専攻(学生定員:40名)がある。また、専門職学位課程として、教職開発専攻(学生定員20名)を持つ(表1)。

表1 教育学研究科の課程・専攻・専修(平成21年5月1日現在)

課程(学位)	専攻	専修
修士 (修士(教育学))	学校教育	教育科学
		教育心理学
		教育臨床・特別支援教育
	教科教育	国語教育・日本語日本文化教育
		社会科教育
		数学教育
		理科教育(文化財科学を含む)
		音楽教育
		美術教育(書道、伝統文化・文化財教育を含む)
		保健体育
		英語教育(異文化理解を含む)
		生活科学教育
	専門職学位 (教職修士(専門職))	教職開発

専修単位で教員を配置し、院生一人に対して複数の教員が研究指導を行う体制をとっている。

課程、専攻の教員配置は以下のとおりである。

修士課程 学校教育専攻 教授 8名 准教授 12名

教科教育専攻 教授 47名 准教授 26名

専門職学位課程 教職開発専攻 教授 6名 准教授 2名 講師 1名

平成16年度の国立大学法人化にあたって、本学大学院は、上記の学則を踏まえ、以下の基本目標を定めた。「大学院においては、学士課程との連携を図るとともに、現職教員及び社会人のリカレント教育を含む**高度専門職業人としての、リーダーシップを発揮できる教員及び教育者の養成**を行う。」第1期中期目標では、「学校教育の高度化と多様化に応えるため、教育に関する諸科学の理論と実践を教授研究し、教育実践を視野に入れた、より高度な専門的力をもった高度専門職業人としての教員及び教育者の養成をめざす。また、現職教員に対する大学院教育の一層の充実を図る。」としている。

学芸の伝統と教師教育を統合的に継承発展させてきた本学は、「学校教育の高度化と多様化に応えるた

め、教育に関する諸科学の理論と実践を教授・研究し、高度専門職業人としての教員及び教育者の養成をめざす(大学院便覧)ことを使命として、教育の現代的課題ならびに教育大学に対する社会からの高いニーズに答えてきた。平成 20 年度には上記の専門職学位課程教職開発専攻を設置するとともに、修士課程の改組を行った。

修士課程において学生が修得すべき知識・技能は以下のとおりである。

- ・研究科共通科目(必修)によって、現代の教育課題を俯瞰し、問いを持ち、課題化する力を獲得する。
- ・専攻共通科目によって研究方法に関する知識と技能を獲得する。
- ・専修専門科目群により、専門知識、技術を獲得する。
- ・課題研究及び修士論文の作成過程において、問題意識を先鋭化させ、論理構成力と問題解決力を獲得する。
- ・特色ある共通教育として、奈良の地域文化に関する認識形成と教材開発を行う。
- ・院生の学びの集団を形成し、院生間コミュニケーションの質を高めながら自由な研究環境を醸成し、自主的自立的な活動へと帰結させる。

II. 教育プログラムの概要と特色

平成 19 年度に立ち上げた「地域と伝統文化」教育プログラムは、「奈良の伝統文化とその源流」を対象として、教材作成、教授法・学習法の開発、及び発信法の修得に関する高度な教育力量形成を目標とするものである。これは、現代の知識基盤社会を多様に支える教育者の育成を使命とする本学教育学研究科における教育の一環として位置づけられた。本プログラムは、I で掲げた修得すべき知識・技能のうち、「特色ある共通教育として、奈良の地域文化に関する認識形成と教材開発を行う。」事項の具体化にあたる。同時に、「院生の学びの集団を形成し、院生間コミュニケーションの質を高めながら自由な研究環境を醸成し、自主的自立的な活動へと帰結させる。」事項にも留意した。

「地域と伝統文化」教育プログラム階層構造を、図 1 に示す。教育学研究科の学びの階梯に沿いつつ、高度知識基盤社会の多様な教育課題としての「伝統文化継承者かつ現代文化の担い手」を育成する。修士課程 1 回生の段階で「体験に基づく歴史・文化の内面化」、2 回生の段階で「伝統文化発信手法の獲得」が可能になるよう組織化・体系化されたプログラムである。本学で学び教育者を目指す大学院生に、所属の専攻・専修によらず共通して、ユーラシア大陸に向かって開かれた日本文化の中心で、現代に至るまで広範に規範性を保ち続けた奈良の文化について、学際的・教科横断的な認識・理解を持たせる。

教育の現代的・国際的な課題を解決するためには、自国の文化に対する知識と正しい認識とが必要不可欠である。この観点から構想された「地域と伝統文化」教育プログラムでは、「世界の中の奈良—伝統と継承・発信—」をプログラム共通コア、「伝統文化発信法」I・II・IIIをプログラム実践コアに据えた編成とした(図 2 参照)。文化財科学・美術工芸実技・美術史等からなる「伝統文化・文化財」、異文化比較・異文化内容学等からなる「異文化理解」の二本の柱が支えることにより(理念図として図 4 も参照)、「伝統文化継承者かつ現代文化の担い手」としての教員及び広義の教育者を育成しようとするものである。平成 19 年度まで教育実践開発専攻を軸として実践的な成果を上げてきたカリキュラム構造が、このプログラムを支える基盤として存在している。

本教育プログラムにおいては、特定分野における知識・技能だけでなく、関連する分野の基礎的素養の涵養を図り、フィールドでの学びを通して学際的分野への対応能力を育成する。歴史学・美術史学など人文・社会科学的専門性の深化と同時に、美術工芸模写復元、あるいは現代作品制作へのその応用など実技面からの知見や、材質や成分に関する自然科学的知見などの学際的知識を応用・総合化する能力が大学院学生に実践的に賦与される。このプログラムの受講によって、高度知識基盤社会における専門職業人にふさわしい個別の知識・技能・アイデアが実践的に束ねられ、総合化されることとなる。また本教育プログラムは、日本文化に興味を持つ大学院留学生、とりわけ教員研修留学生に提供される魅力ある大学院プログラムとしての性格を併せ持っている。

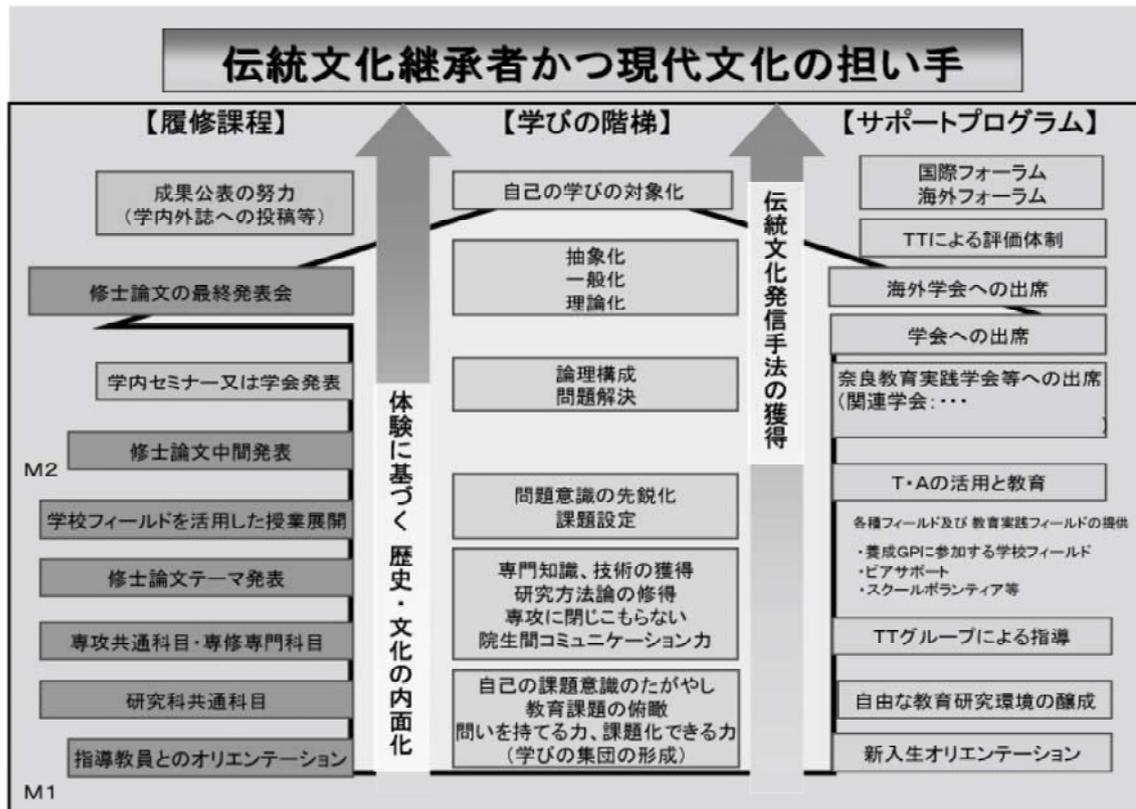


図1 「地域と伝統文化」教育プログラム階層構造

遺跡や古美術・伝統工芸・古社寺・伝統芸能等、奈良のフィールドを活かした伝統文化の理解・継承・発信を演習内容に組み込んで展開する。これへの参加により、大学院生は自立的な研究遂行能力やプロジェクトの企画・マネジメント・発表能力を高め、理論的知識を基礎として、それらを自発的に応用する実践能力を身に付けることができる。

専攻・専修横断のプログラム共通コア科目「世界の中の奈良—伝統と継承・発信—」を、事業期間が開始した平成19年度に立ち上げた。さらにこのプログラム共通コア科目を実践と結びつけるプログラム実践コア科目「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを平成20年度より展開した。この「伝統文化発信法」の内容は、本学の特色を踏まえたテーマを基礎として、調査・研究・収集法（インプット）、資料化を踏まえた展示法・発信法（アウトプット）までを体験的・実践的に学ぶものである。図2で示されたプログラム共通コア科目、プログラム実践コア科目、及びそれを深める科目（深化科目）群の履修を前提として、地域に根ざす広義の教育者として総合的な力量を備えることが可能になる。学内における演習・実践だけでなく、国内外での実地研修を通じて、奈良の伝統文化・文化財の源流や波及の様相について事前調査し、現地訪問後に成果を発信（研究発表、シンポジウム、ホームページ公開等）する。この過程はプログラムの科目群の内容を補完し、国際的視野に立って伝統文化を現代に活かすための知識・技能の総合的修得を可能とする。また、ミニフォーラムを組み込んだ「地域と伝統文化」教育連続講座（公開講座の性格を併せ持つ）の準備過程と開催への参加により、学内外有識者や市民の伝統文化観を学び、教育課題として伝統文化を認識することの共有化を図る。国内外実地研修や連続講座に参加した院生は、院生間、及び対外的コミュニケーションの質を高めながら、自主的自立的な企画・実施の運営方法を会得することができる。この院生の達成度はカンファレンス・シンポジウムでの発表準備とプレゼンテーションの段階の完成度により検証される。

さらに、本学が中期目標に掲げている「アジアに重点を置いた国際化」の観点から、現時点で協定を結んでいるアジア三大学、嶺南大学校（韓国）・インドネシア教育大学・西安外国語大学（中国）との関係を基盤に、他にも中国、韓国、タイなどの諸大学との協定締結の予定を視野に入れ、戦略的

に拡張するアジア教育大学国際交流ネットワークを構築する。このネットワークを通じて、大学間の国際的連携協力活動ひいては共同研究を喚起・促進する。

Ⅲ. 教育プログラムの実施結果

1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

(1) 教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

① プログラム実施前の課題

本学では、従来奈良の伝統文化・文化財に関係する講義が各専修で行われてきた。しかし、それらを束ねる科目がなく、各専修の枠組みのなかでの個別の知識や技能修得の範囲に留まっていた。また、大学院修士課程のカリキュラムは、教育方法学的内容の研究科共通科目「世界の中の奈良」の周囲に各専修専門科目が個々に位置づくのみで、教科間の連携がとられていなかった。さらに、国際化を伝統文化理解の域にまで深め、また海外と奈良との文化的関係やその意義を意識的に追求する態度は、本学大学院生においては従来必ずしも活発とみられなかった。同時に、海外協定締結校との連携関係が単発的で、本学の位置づく奈良が、アジアに淵源する国際的文化を継承してきた地としての地域性・独自性を有することについて、アピールが不足していたことは否めない。

② 「地域と伝統文化」教育プログラムによる改善

「地域と伝統文化」教育プログラムは、プログラム共通コア科目「世界の中の奈良—伝統と継承・発信—」と、それを実践と結びつけるプログラム実践コア科目「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを新たに開設し、深化科目として、本学大学院カリキュラムにすでに内包されている奈良の地域文化やその国際性に関する科目を、「地域と伝統文化」のコンセプトのもとに有機的に再構成するものである。



図2 「地域と伝統文化」教育プログラムのカリキュラム構造と科目群(平成21年度)

プログラム共通コア科目を平成 19 年度から、プログラム実践コア科目「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを平成 20年度から開設した。深化科目は、年度によって変動はあるが、平成 19 年度～21 年度にかけておおむね50科目を配して実施されてきた。プログラム共通コア科目(必修:2単位)、プログラム実践コア科目(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ3科目のうち2科目以上を選択必修:4～6単位)、深化科目より合計22単位以上を習得した大学院生に、プログラム実施委員会の審査を経て「プログラム修了証書」を交付し、奈良の文化を継承・発信する教育的力量をつけたことを証することとした。

プログラム共通コア科目、プログラム実践コア科目の受講者数は表1のとおりである。平成19年度まで定員60名、平成20年度以降は定員50名の教育学研究科修士課程にあって、一定の受講者数を得ている。体制の

	授業科目名	平成19年度	平成20年度	平成21年度
プログラム 共通コア科目	世界の中の奈良 —伝統と継承・発信—	11	17	7
プログラム 実践コア科目	伝統文化発信法Ⅰ	未開講	11	8
プログラム 実践コア科目	伝統文化発信法Ⅱ	未開講	17	7
プログラム 実践コア科目	伝統文化発信法Ⅲ	未開講	3	7

表1 平成19～21年度開講 共通コア科目・実践コア科目受講者数

整備に伴い、平成21年度には年度当初にプログラム履修希望者を募った結果、修士1回生・2回生の2学年（定員 100 名）で21名の希望者があった。そして、所定の単位を揃えたプログラム修了者は、平成20年度に3名、平成21年度には5名であった。

カリキュラム構造構築上の考え方を、「図3 教育学研究科カリキュラム車輪モデル」に示す。平成16年度改組により新設された本学大学院の研究科共通科目（必修）「現代における学校教育の課題」は、平成20年度改組を経て修士課程共通科目となった今も、教育学研究科カリキュラムのコア（あるいはハブと評したほうが現況に見合うかと思われる）となっている。専攻共通科目、専修専門科目（学校教育専攻では学校教育科目、教科教育専攻では教科教育科目・教科科目）等がその周囲に、あたかも放射状に配されている。これは車輪にたとえるならば、教育方法的性格を持つ研究科共通科目（必修）をハブとし、教育内容学的性格を持つ専攻共通科目、専修専門科目等をスポークとする構造である。

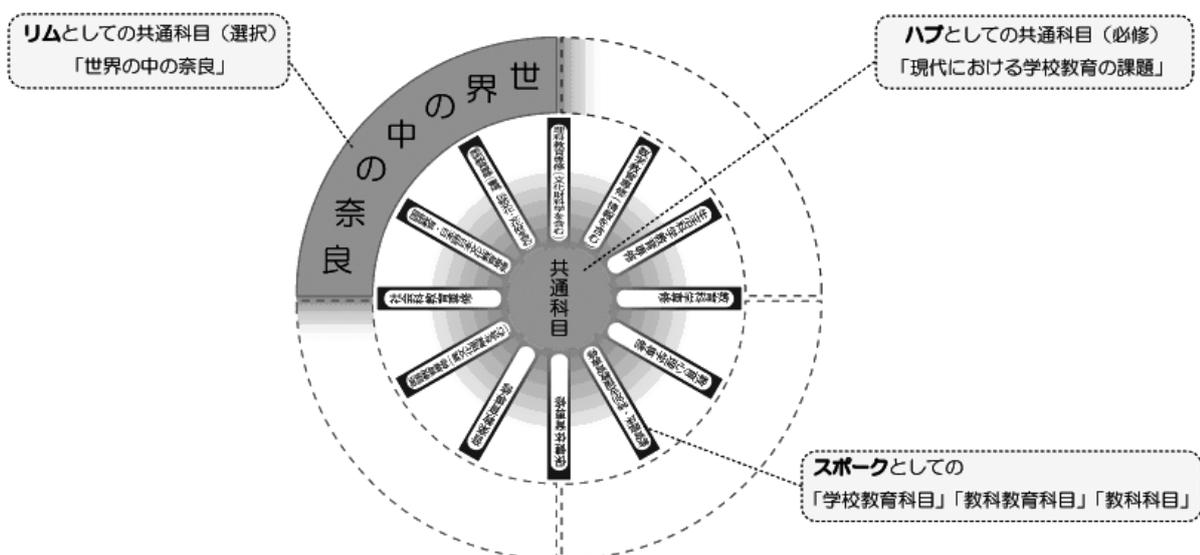


図3 教育学研究科カリキュラム車輪モデル

「地域と伝統文化」教育プログラムにより、コアカリキュラム構造全体をさらに強化し、あたかも車輪のように完成するための、教科横断的な、教育内容学相互の関連付けの輪（リム）、研究科共通科目（選択）という発想が生み出されたことは特筆される。

「地域と伝統文化」教育プログラムにあっては、新設したプログラム共通コア科目「世界の中の奈良」、プログラム実践コア科目「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのいずれもが、奈良の特色を教科横断的に理解、継承、発信する内容となっている。各専門的性格がより強い「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲがそれぞれ理科教育、美術教育、国語教育・日本語日本文化教育の教科科目と位置づけられる一方、プログラム共通コア科目「世界の中の奈良」は修士課程共通科目（選択）に位置付けることが検討されている。「世界の中の奈良」は「図3 教育学研究科カリキュラム車輪モデル」のように、教育内

容学相互の関連を有機的に編み上げてゆく機能を持つ科目である。そこで育まれる地域と伝統文化に関わる教科横断的な力量は、単に総合学習や校外学習に資するだけではなく、便宜的な教科の区分では分析しきれない総合性を持っている社会や環境の中で、豊かに生きる力、知恵を身につけることにつながっている。教育学研究科のコアカリキュラムにあっては、教科横断的な教育内容学相互の関連を、立地や教育研究の伝統など当該大学院の条件に見合う形で追究することが、今後ますます求められてゆくとみられる。なお、これらの授業科目を展開してゆく上で、本プログラム補助金により任用された特任教授の役割は大きく、また、任期付・特任助教の任用は、カリキュラムの運営上も、大学院生と教員との関係の円滑化のうえでも、まさに不可欠であった。同時に、教育効果を発揮するため、院生の情報処理実習や教室環境等の条件整備も不可欠であった。

本プログラムでは当初から図4の「地域と伝統文化」教育プログラムの理念図を構想した。そこでは、本学中期目標に掲げた「アジアに重点を置いた国際化」の観点から、本学のアジアにおける協定校三大学、嶺南大学校（韓国）・インドネシア教育大学・西安外国語大学（中国）との関係を基盤とするアジア教育大学国際交流ネットワークの構築をめざしてきた。

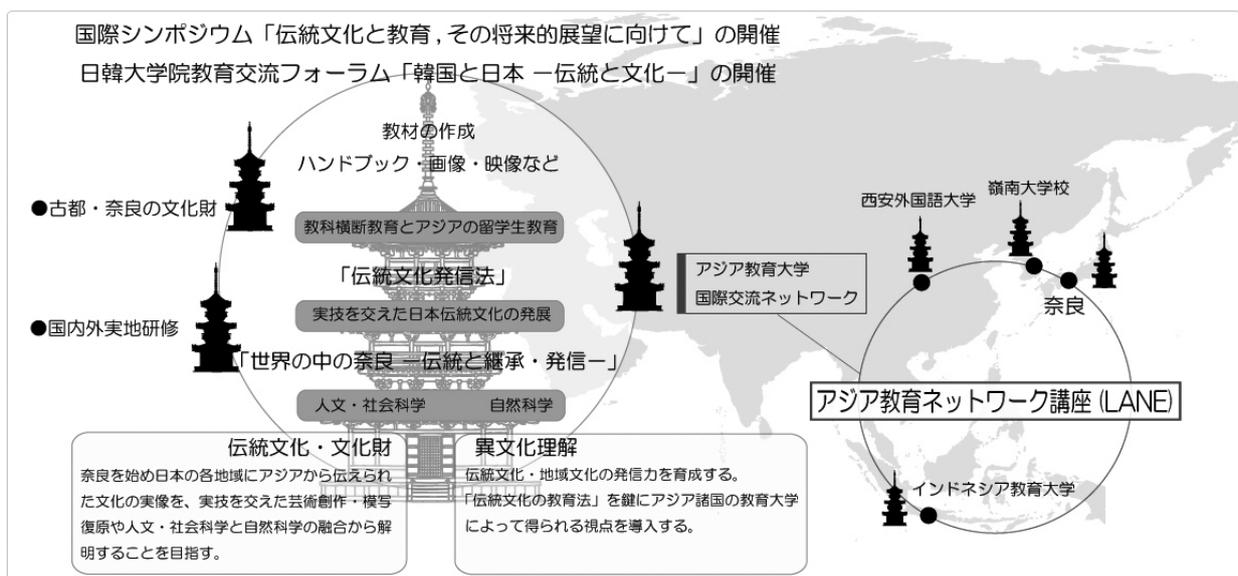


図4 「地域と伝統文化」教育プログラムの理念図

この理念に従い、本プログラムは平成19年度から連携の基盤づくりを開始し、平成20年度・21年度に以下のような国際カンファレンスを開催した。

a. アジア教育ネットワーク講座 (Lectures in Asian Network of Education、略称 LANE。平成20年11月20日～11月22日。於 奈良教育大学)

協定三大学より各一名の教員を招き、本学教員も含め伝統文化教育の取組・海外における日本語教育に関する講義を行った後、講師と大学院生との総括ディスカッションを実施した。

b. 第2回百済文化国際シンポジウム (平成21年6月12日・6月13日。於 奈良教育大学)

平成20年度に東京学芸大学と韓国・公州大学校との間で開催された百済文化国際シンポジウムに、第2回からは本学が加わり、本学を会場に開催した。「地域と伝統文化」教育プログラムとしても大学院生が内容・運営の両面で積極的に参画し、教員とともに国際シンポジウムの舞台上で研究発表を行う機会を得た。本シンポジウム開催後公州大学校と本学との間で協定が締結され、アジア教育大学国際交流ネットワークの戦略的拡大の一步となった。

c. 日韓大学院教育交流フォーラム「韓国と日本ー伝統と文化ー」 (平成21年9月24日、於 韓国嶺南大学校)

前年度の LANE の開催でいっそう強固・緻密となった連携を活かし、平成 21 年 9 月には本学の教員 4 名、院生 9 名が韓国に渡り、嶺南大学校で日韓大学院教育交流フォーラム「韓国と日本 ―伝統と文化―」を開催した。

開会挨拶 徐吉守（嶺南大学校副総長）・重松敬一（奈良教育大学副学長）

第 1 部 大学院生による「伝統と文化」をテーマとした研究発表

伊藤実保（奈良教育大学）「パルメット文様から見る古代日本と韓国」

申彩京（嶺南大学校）「安岳 3 号墳の墓室構造について」

作佐部蛸（奈良教育大学）「小場恒吉と楽浪について」

崔強國（嶺南大学校）「石南巖寺の石造毘盧舎那佛坐像について」

舘田千明（奈良教育大学）「外国にルーツをもつ子ども達への学校教育のあり方」

陳美嬋（嶺南大学校）「韓・日女流日記文学考察」

湯ノ口利恵（奈良教育大学）「古代における木材利用」

金恩鏡（嶺南大学校）「古墳出土雲母の性格―慶州地域雲母の形態を中心として―」

第 2 部 両大学教員による発表、及びディスカッション・質疑応答

山岸公基（奈良教育大学）「美術工芸における新羅・日本関係の一側面」

林南壽（嶺南大学校）「韓日の薬師如来像」

金原正明（奈良教育大学）「律令制とともに日本に伝播した有用植物」

鄭仁盛（嶺南大学校）「關野貞と高句麗遺跡の調査」

ディスカッション及び質疑応答

フォーラムでの本学大学院生の発表は、自国と他国双方の文化への理解を深め、国際的な議論の場での経験を積むことが第一の目的であった。通訳の嶺南大学校教員諸氏のご努力により、内容的にも高水準の議論が展開し、フォーラムの成果を挙げる事ができた。なおフォーラムのポスターデザインは本学院生が担当した。



写真 1 日韓大学院教育交流フォーラム「韓国と日本 ―伝統と文化―」 集合写真

d. 国際シンポジウム「伝統文化と教育、その将来的展望に向けて」（平成21年12月 5 日・12月 6 日、於 奈良教育大学）

平成 20 年度開催の LANE によって緊密化した協定三大学との連携を背景に、平成 21 年度には協定三大学から各二名の教員を招いて、本学において国際シンポジウム「伝統文化と教育、その将来的展望に向けて」を開催した。

12 月 5 日（土）

シンポジウム開催式 開催挨拶 長友恒人（奈良教育大学学長）

基調報告 山岸公基（奈良教育大学）「『地域と伝統文化』教育プログラム…三年間の取り組み」

シンポジウム第一部

趙萍（西安外国語大学）「中国西安市における入浴文化について」
 羅工洙（嶺南大学校）「日本の近世・近代における中国俗語趣味」
 Melia Dewi Judiasri（インドネシア教育大学）「インドネシア人が見た日本文化」
 坂本あゆみ（本プログラム参加院生）「敦煌の千手観音とその周辺」
 作佐部蛭（本プログラム参加院生）「古写真に残された情報とその活用」

12月6日（日）

シンポジウム第二部

金原正明（奈良教育大学）「奈良文化遺産と奈良教育大学」
 林南壽（嶺南大学校）「韓日における降魔触地印図像の受容」
 張藝文（西安外国語大学）「近代中国の留学教育…留学対象国の変遷を通じて」
 Safrina Noorman（インドネシア教育大学）「Re-positioning Sundanese Culture in the Indonesian Education Context」
 舘田千明（本プログラム参加院生）「JSL(Japanese as a Second Language)日本語教育と学校文化」
 増田恵子（本プログラム参加院生）「教材の観点から『奈良町民話地図』の可能性を考える」

総括ディスカッション

シンポジウム総評

海外フォーラム・国際シンポジウムでは、教員のみならず院生も発表やポスター制作などによりプレゼンテーションを行った。協定大学の教員（本プログラム評価委員）からは、「日本と韓国の若い大学院生が集まって、真摯な態度で、自分たちの論文を発表し、また討論しあう感動的な場面は、これからの国際化が進む道を示唆してくれた」など、積極的な発信の姿勢や国際性の涵養方針について肯定的な評価を得た。

また、海外フォーラムや国際シンポジウムでの発信の前提となる知識・経験・技能・国際性を習得すべく、学内外有識者による、授業内容を補完する大学院生対象の「地域と伝統文化」教育連続講座や、奈良の伝統文化・文化財の源流および伝播の実態を探る国内外実地研修を積極的に実施した。連続講座は足掛け三か年で計23回、うち4回は大学院生主体のミニシンポジウムであって、学内だけでなく地域にも公開され、地域との連携の緊密化に寄与した。国外実地研修は計7回に及び、第7次は上記c.の日韓大学院教育交流フォーラム開催に伴うものであった。

2. 教育プログラムの成果について

(1) 教育プログラムの実施により成果が得られたか

「地域と伝統文化」教育プログラムは、奈良の伝統文化とその源流について、最新の教育内容学の成果に基づく教材作成、ひいては教授法・学習法の高度な力量開発を目的とする。そこでは、参加大学院生がどのように「体験に基づく歴史・文化の内面化」、「伝統文化発信手法の獲得」を果たし、「伝統文化継承者かつ現代文化の担い手」となりえたかが問われることになる。

平成18年度から平成21年度にかけての本学大学院修士課程においては、修了者数に対して67～78パーセントの就職率を維持している。同時に、入学定員60人であった平成18/19年度には入学志願者数103/104人、専門職学位課程発足に伴い入学定員が50人に減少した平成20/21年度に入学志願者数91/95人と、1.7倍から1.9倍の競争率で推移した。定員充足率も、110～125パーセントを維持している。また、ティーチング・アシスタント（TA）としての採用者は、入学定員60人であった平成18/19年度に39/44人だったのに対し、定員が50人に減少した平成20/21年度にも44/40人と遜色ない。この背景には本プログラム補助金を活用した積極的なTA採用があり、院生の指導力向上にも寄与している。

このように継続して実績を示している本学大学院修士課程にあって、平成18年度に1件であった

論文発表数が、平成 19 年度に 8 件、平成 20 年度に 6 件、平成 21 年度に 8 件と、「地域と伝統文化」教育プログラムを展開した平成 19 年度～平成 21 年度に激増したことが注目される。学会発表数も、プログラムの総括年度となった平成 21 年度には、前年度までの 5～6 回に対して 15 回に激増している。これは、大学院生の研究にとって本プログラムのサポートは有効であって、プログラムの実施により履修者の研究遂行上の力量が向上し、論文執筆・学会発表への意欲が増し、研究内容の充実が実現したこと、またそのような活性化された状況が全学にも波及したことを示している。これは、本教育プログラムの大きな成果といえよう。

本プログラムにより継続的に作成されてきた教材のうち、「ならまち民話地図」(図 5)は教員の指導の下、大学院生がフォント作成からデザインのすべてを担当して完成したものである。作成過程において、奈良の口承文化をわかりやすく説明する工夫・努力が大学院生の表現力育成に大きく寄与した。現在奈良市総合観光案内所にパネル掲示ならびに常備され、教材作成・提示により社会の要請に応える実例として、プログラム展開の方向を指し示している。教材の英語版および動画版も完成し、ホームページで公開している (URL <http://eprct.nara-edu.ac.jp/eprtc/nfwm/nfwmtp.html>)。



図 5 「ならまち民話地図」日本語版 表面



裏面

本プログラムを履修した後に大学院生を対象にアンケートを実施した。その結果によれば、「本 GP を履修して、自分の研究や作品などを発信する技術や機会を得ることができましたか？」という設問に対して、有効回答 16 人分のうち「はい」と答えた履修生が 14 人（「いいえ」 2 人）であった。「本 GP を履修して、自分の研究や作品などを展示・公開しましたか？」という設問に対して、「はい」と答えた履修生が 13 人（「いいえ」 3 人）であった。この結果は、大学院生にとって、自立的研究遂行能力や発表能力の向上に本プログラムが有効であったことを示している。「今後もこのような教育プログラムが奈良教育大学で展開してほしいですか？」という設問に対しては「はい」と答えた履修生が 15 人（「いいえ」 1 人）と、「地域と伝統文化」教育プログラムを組織的・継続的に継承・発展してゆくことへの期待が受講生間で非常に高いことが証されている。

また、本プログラムでは発足当初から独自に、海外評価委員（嶺南大学校教員 2 名、インドネシア教育大学教員 1 名、西安外国語大学教員 1 名）を含む評価委員会を設置し、各年度の活動に対する外部の評価をプログラムの活動に活かす取り組みを継続してきた。GP 履修院生に対するアンケートも評価委員会の提言に沿っての実施であった。

海外からの評価については、年度ごとに報告書を郵送し文書上での査読・吟味を求めた。またアジア教育ネットワーク講座 (LANE) や国際シンポジウム「伝統文化と教育、その将来的展望に向けて」の機会に海外評価委員を招聘して、講義・発表のみならず奈良教育大学での大学院教育を実地調査していただいた。日韓大学院教育交流フォーラム「韓国と日本 ―伝統と文化―」共催に際しては、海外評価委員をはじめとする嶺南大学校教員の積極的参画を得てフォーラムを成功に導くことができた。

海外評価委員から寄せられた意見としては、「奈良の伝統文化・文化財を機軸に、日本各地やその

源流としてのアジア地域…との関連性を探り、同時にアジアを中心とする諸地域との異文化間の相互理解を鍵として、大学院教育を充実させる点や、「共通コア科目、実践コア科目、深化科目の開設は、新しい試みとして今後の大学院教育の改革に結びつく」、などが挙げられた。それらは、本プログラムを肯定的に評価し、プログラムの目指す方向を指し示す内容が多かった。特に、LANE やフォーラムを通じて接した「地域と伝統文化」教育プログラムを、「実に綿密に企画し、巧妙に組み込まれた教育プログラムである」と評価したうえで、「修士論文、レポート、ならまち民話地図をはじめとする芸術作品など、…多大な成果をあげてきた」とコメントされた。このプログラムの本学の大学院教育改革への寄与を、「奈良教育大学の大学院生が、自国の文化に対する知識と正しい認識だけでなく、奈良文化についての学際的・教科横断的な認識・理解をもち、伝統文化を発信することができる教育者に一歩近づけた」と積極的に評価する意見があったことが注目される。

本プログラムの成果を総括すれば以下の通りである。

- ・本プログラム参加院生は、地域・あるいは国際交流の場での双方向的な学び会いの中で、多様な課題を意識し、この解決に向けて積極的に発信のできる教育者として成長した。その成果は受講生による学会発表、論文発表が顕著に増加した実績、アンケート結果や作成教材などから窺うことができる。
- ・受講生は、奈良の地域文化に関する学術的認識を深め、教材開発を行った。所期の目的達成とともに、学びの集団の中でコミュニケーションを緊密に行い、自立的な学習・研究活動を行うことができた。
- ・海外研修の事前事後調査や国際シンポジウム・海外フォーラムの発表を通じて、受講生は奈良の伝統文化が地方に孤立したものではなく、歴史的に大陸の文化と連綿として繋がってきたものであることを認識し、地域の文化をより客観的に俯瞰する視座を獲得した。この獲得経過は、海外評価委員の高い評価を得た。

3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

(1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

「地域と伝統文化」教育プログラムの実施状況・成果を踏まえた今後の課題を挙げる。共通コア科目「世界の中の奈良」の修士課程研究科共通科目（選択）への位置付けが、補助事業期間中に継続的に検討されたものの実現していない。ただ、これは主に修士課程のカリキュラムの見直しで、現在計画が進行中である学部改組のカリキュラム編成とも連動することに起因するものである。教科横断的な教育内容学相互の関連を、立地や教育研究の伝統など当該大学院の条件に見合う形で追究する先駆けを成す本プログラム、その共通コアとしての「世界の中の奈良」の意義は全学に浸透しつつあり、「世界の中の奈良」の修士課程研究科共通科目（選択）化は早晚実現されるとみられる。

現在は、プログラム共通コア科目、プログラム実践コア科目、深化科目より合計 22 単位以上を習得した大学院生に、プログラム実施委員会での審査を経て「プログラム修了証書」を交付し、奈良の文化を継承・発信する力量をつけたことを証している。課題として、「地域と伝統文化」に関する学びをより実質化・継続化するため、履修記録、ポートフォリオなどの整備・蓄積についても、今後検討の必要がある。

また、大学院生のみならず協定締結校の評価委員や関係教員からも高い評価を受けた、海外フォーラムや国際シンポジウム、海外研修を、補助事業期間終了後も従来のペースで開催してゆくのは困難である。しかし今後も学内外予算の獲得に努め、一定の周期で継続してこれらを実現し、アジア教育大学国際交流ネットワークをさらに戦略的に発展させ、教育・研究での協力関係を強化・拡張してゆく計画である。

本プログラムについては、平成 20 年度・21 年度、そして補助期間終了後の 22 年度も継続して大学院新生のオリエンテーションで説明を行った。奈良教育大学ホームページ上でも活動内容を逐次掲載するなど事前周知・広報に努めているが、プログラム内容・履修システム・利用可能設備・各種

申請方法に関しての大学院修士課程学生への浸透（特に伝統文化に関する前提を持たない大学院学生に対して）、全学プログラムとしての動機付け、教員も含めた学内での認知度を更に向上させる方策が今後とも必要である。

本プログラムの柱の一つとしていた教材の作成や画像・映像の蓄積・公開も一定の成果を収めたが、それらに携わる大学院生数の拡大、作成された教材や画像・映像公開方法の質を向上させることも将来に向けての課題である。

4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

本教育プログラムでは、公式 HP を専用サーバ上に設置し、随時活動内容とその成果を広く発信してきた。奈良教育大学公式 HP 上でも併せて情報発信を行い、奈良教育大学の特色ある取組として周知を図ってきた。(URL <http://epret.nara-edu.ac.jp/eprtc/>)

刊行物としては、平成 19 年度活動報告書 (52 ページ)、平成 20 年度活動報告書 (96 ページ)、そして 3 か年の取組を総括する『「地域と伝統文化」教育プログラム総括報告書 (2007-2009 年度)』(124 ページ) を出版し、該当年度の取り組みと成果 (最終年度にあっては 3 年間の取組の総括) を広く公表してきた。また、本学美術教育専修と連動して刊行してきた修了研究報告 (平成 19 年度、平成 20 年度、平成 21 年度) では、プログラム参加大学院生の研究成果を活字論文として掲載・公表している。

本教育プログラムの教育的成果は、プログラム参加大学院生が積極的に参加して行われた様々なカンファレンスにおいて発信された。Ⅲ-1-(1) にも挙げたように、国外実地研修に参加した大学院生の貴重な経験・成果を発表する機会となった 4 回のミニシンポジウム (「地域と伝統文化」教育連続講座の一環)、本学で開催された第 2 回百済文化国際シンポジウム、韓国・嶺南大学校で行われた海外フォーラム (日韓大学院教育交流フォーラム「韓国と日本 - 伝統と文化 -」) における大学院生と教員の研究発表、本学で開催されたアジア教育ネットワーク講座 (LANE、平成 20 年実施) とその発展である国際シンポジウム「伝統文化と教育、その将来的展望に向けて」(平成 21 年実施) における本学大学院生とアジア協定 3 大学ならびに本学教員による研究発表などがある。それらの機会では、本教育プログラムの展開に伴って醸成された大学院における教育手法と大学院生の教育・研究成果が、国際的な広がりを持って公開・発信された。

加えて、プログラムに伴って展開された実践コア科目「伝統文化発信法」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲや深化科目・連続講座で企画された展覧会・写真展では、大学院生が自主的に企画、準備、実施を行い、彼らがプログラムに参加することで獲得した力量を公開する機会となった。そして、プログラムの展開に伴い順次実施されてきた連続講座や各種シンポジウム・フォーラム、そして展覧会の広報に非常に有益であったポスター・チラシの制作も大学院生が主体となって行った。以上のように、活発な情報公開を行うとともに、大学院生の企画力と発信力が育成される貴重な機会となった。

本教育プログラムの活動と成果は、各種新聞 (毎日新聞奈良版 2008 年 6 月 22 日 (日) 毎日新聞奈良版 2008 年 8 月 6 日 (水) など) や地域情報紙 (『奈良人 naranto』季刊 | 冬 2009 No. 27 2009 年 12 月 1 日発行) に掲載され、広く周知された。さらに、プログラム参加大学院生が中心となって作成した教材「ならまち民話地図」は、教材として広く活用されるとともに、奈良市総合観光案内所でパネル展示・利用されるなど、本プログラムの具体的な成果物として社会において広範に公開・活用されている。

5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

本プログラムは、伝統文化・文化財を奈良の顕著な特色としてとらえ、これを学校教育に取り入れていくために教材化し、教授法を試行し、発信していくという教育プログラムである。奈良県における教員養成の特色化として伝統文化・文化財を教育内容として取り上げたが、地域の特色を活かす教員養成の研究として普遍性をもった教育方法を開発することを意図した。受講した学生はプログラムに参加することによって、地域との双方向的な学び会いの中で多様な課題を意識した教育者として成長した。このことは受講生が作成した教材がシンポジウムや講義で継続使用されていること、一部は奈良市総合観光案内所で活用されていること、受講生による学会発表、論文発表が顕著に増加したこと、アンケート結果などから窺うことができる。

海外研修の事前事後調査や国際シンポジウム・海外フォーラムの発表を通じて、受講生は奈良の伝統文化が地方に孤立したものではなく、歴史的に大陸の文化と連綿として繋がってきたものであることを認識し、地域の文化をより客観的に俯瞰する視座を獲得した。これは認識の広域性を目指した図4の理念の具体化である。

本プログラムの共通コア科目である「世界の中の奈良―伝統と継承・発信―」は、修士課程の特定の専攻分野に限定されず、多くの学生が受講した。受講生は、奈良の地域文化に関する認識を深めて教材開発を行う、という所期の目的に対して、学びの集団の中でコミュニケーションを緊密に行い、自立的な学習・研究活動を行うことができた。

以上の成果は、教科指導に関して、細分化された教科の枠を広げて、自分が指導する教科が他の教科内容とも関連し、日常的には意識することが少ない地域の文化などとも関連していることを院生が体験的に認識することができた。本プログラムは、奈良の地域的特色である「伝統文化」を取り上げたが、どの地域においてもそれぞれの教育学研究科が立地する地域の特色をテーマとして、自立的な学習・研究活動を促すことができるという一般性・汎用性を提示したものである。本学教育学研究科では、共通科目を土台とする階層構造的なカリキュラム編成のなかで、教科横断的かつ地域性を反映した伝統文化の内容の連続性を持たせた。このようなカリキュラム内容はそれぞれの大学の特色を活かす形で適用可能であり、新規で系統性のある大学院での教育課程の提言となっている。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

本プログラムでコア科目として開設した「世界の中の奈良―伝統と継承・発信―」、「伝統文化発信法Ⅰ」、「同Ⅱ」、「同Ⅲ」は支援期間終了後も継続して開講する。特に、「世界の中の奈良」は、地域の特色を学校教育の中に活かすという普遍的な課題として、学内合意を得て研究科の共通科目(選択)として恒常化し、プログラムの継続と発展を期す。

本プログラムの成果を基礎に、地域の伝統文化(地域の特色)を学校教育に効果的に活かすために、本学において今年度中に設立が構想されているESD(持続発展教育)センター(仮称)の文化財・世界遺産教育部門(仮称)として、継続的に研究開発を行うこととしている。その場合、本プログラムの成果・実績を発展させる方向で、奈良の地域的特色として、「伝統文化」に加えて、「文化財」、「世界遺産」を視野に入れた教材作成、教授法・学習法の開発、及び発信法の修得に関する高度な教育力量形成の獲得を目標とする。

本プログラムで基礎を築いた海外ネットワークによる連携大学等とのシンポジウムやフォーラムについては、本学の国際交流の一環として、学生が引き続き参加できるように計画する。平成22年度は、その一環として本学において開催を予定している韓国の公州大学校、東京学芸大学と共催する「第3回百済シンポジウム」に向けて大学院生が発表する準備を進める。また、公開講座・展示・ホームページなどによる成果の発信についても、継続するプログラムの中に位置づけて、大学院生の自立的な活動となるような展開を行っていく。

以上のプログラムの今後の発展的な展開においては、大学院教育に限定することなく、学部教育でも地域の特色を活かす教材としての伝統文化・文化財・世界遺産を取り上げ、学部と研究科を見通した教育体制を構築し実践することを目標としている。

組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<p> <input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的はあまり達成されていない </p>
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>共通コア科目と実践コア科目を軸にしたカリキュラムが整備され、海外フォーラムを充実させるなど、計画が着実に実施されている。関連科目の履修者は少数であったが、教育面で大学院生や外部評価委員から高い評価を受けており、大学院教育の充実・改善に貢献している。特にプログラム期間中に大学院生の論文数や学会発表数が増加しており、プログラム参加者へのアンケートや海外委員の評価など、多様な吟味を行ってプログラムが実行されている。キーワードでもある「世界の中の奈良」を発信すべき国際的な取組を充実させ大学院生が国際舞台で発表する機会を確保することで、今後の発展が期待される。</p> <p>情報提供については、地元新聞や地域情報紙など、さまざまなチャンネルを通じて広く社会に公表され、社会的にもインパクトをもったことが窺われる。</p> <p>支援期間終了後の大学の取組については、持続発展教育センター（仮称）の設立構想やコア科目の共通科目としての恒常化が学内合意されるなど、今後も継続的に進めていく上での十分な措置が示されている。</p> <p>ただし、奈良に特化した伝統文化教育プログラムを通じて、どの地域でも応用可能な一般的汎用性のある教育課程の提言になっている点では奈良をこえた波及効果が認められるが、制度的なレベルでの波及効果はほとんどみられない。</p> <p>今後の方策については、履修大学院生数を増やすために、共通科目としての位置づけを明確にし、動機付けや認知度向上のための具体的な方策をとることによって、更なる充実が望まれる。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>奈良という地域特性を活かした堅実なプログラム編成であり、分野横断的なカリキュラム構造による新しい知のあり方や教育方法を探究することで成果を上げ、伝統文化研究の水準向上に寄与した教育モデルを提示している点で評価できる。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>世界に伝統文化を発信するための国際的な取組を充実させるとともに、奈良という地域固有の条件に依存しているプログラム内容の汎用性と応用性を高めるための、更なる具体化に向けての検討が望まれる。</p>